

こわいことを知りたくて旅にでかけた男の話

グリム Grimm

矢崎源九郎訳

青空文庫



あるおとうさんが、ふたりのむすこをもっていました。にいさんのほうはりこうで、頭がよくて、なんでもじょうずにやつてのけました。ところが、弟のほうときたら、まぬけで、なんにもわからないし、なにひとつおぼえることもできないというありさまでした。ですから、弟の顔を見るたびに、だれもかれもこういうのでした。

「こういうむすこがいたんじや、おやじさんはいつまでたつてもたいへんだなあ！」

こんなわけですから、なにかすることのあるときには、いつもきまつて、にいさんがやらされました。けれども、ときには、おそくなつてからとか、どうかすると夜中よなかなどに、なにかとつてきてくれと、おとうさんからいつかすることもあります。そんなとき、墓地ぼちとか、あるいはどこかおそろしい場所ばしょをおつていかなければならないようなばあいには、にいさんはいつもこうこたえました。

「いやだ、いやだ、おとうさん。そんなところへはいかないよ。ぞつとずる。」

なぜつて、にいさんはこわくてたまらなかつたのです。また、夜など、炬ろうばたで身みの毛けのよだつような話がでますと、きいているものは「うわあ、ぞつとずる」と、よくいいま

弟はすみっこにすわって、じぶんもその話をきいているのですが、それがなんのことやら、さっぱり見当けんとうがつきません。

「みんな、しよつちゆう、ぞつとする、ぞつとするっていつてるが、おれはちつともぞつとなんかしやしねえ。こいつは、きつと、おれにはわからねえことなんだろう。」

さて、あるときのこと、おとうさんが弟にむかってこんなことをいいました。

「おい、そのすみっこにひっこんでいる小僧こそう、おまえは、もうそのとおり大きく、がっしりした男になった。おまえもなにかひとつ、ならいおぼえて、じぶんでくつていくようにしなくちやいかん。みろ、にいさんはいっしょうけんめいやつてるのに、おまえときたら、まるでしにも棒ぼうにもかからん。」

「うん、おとうさん、おれもなにかおぼえたいよ。そうだ、もしできたら、ぞつとするってことをおぼえたいな。そいつは、おれにはちつともわからねえもの。」

にいさんはこれをきいて、わらいだしましたが、心のなかでひそかに思いました。

（ああ、ああ、弟のやつは、なんて大ばかなんだ。あれじゃ、一いっしょう生しょうかかったって、ものになりやしない。三みつ児ごの魂たましい百ひゃくまでつていうからなあ。）

おとうさんは、ため息いきをついていいました。

「ぞつとするか、そいつをおぼえるのもいいだろう。だがそんなことをおぼえたって、それではくつちやいけないぞ。」

それからまもなく、お寺の役僧やくそうがこのうちへたずねてきました。そこでおとうさんは、じぶんの心配しんぱいを、この役僧に話して、弟むすこはなにをやらせてもだめで、なんにもわからないし、なにひとつ、ならいおぼえることもできないといいました。

「まあ、あなた、考えてもみてください。わたしが、なにをやつてくつてもいくつもりだとききますとね、どうでしょう、ぞつとすることをおぼえたいなんて、とんでもないことをぬかすんですよ。」

「それだけのことなら、わたしのところでおぼえられますよ。」  
と、役僧やくそうはこたえていました。

「まあ、そのむすこさんをわたしのところへよこしてごらんなさい。きっと、しこんであげますよ。」

おとうさんは、あの小僧こぞうも、ちつとはしこんでもらえるかなと、考えましたので、すぐ役僧にたのむことにしました。

こういうわけで、役僧はむすこをうちにつれていきました。むすこはそこで鐘かねつきをす

ることになりました。

それから二、三日たった、ある晩ばんのことです。ま夜中よなかごろ、とつぜん役僧やくそうがむすこをおこしました。そして、すぐに寢床ねどこからおきて、塔とうにのぼって、鐘かねをついてこい、といいつけました。

(ぞつとするってというのがどんなことか、きつとおぼえさせてやる。)

役僧はこう考えて、じぶんはむすこよりもひと足さきに、こつそりでかけました。

むすこが塔とうにのぼって、くるりとむきなおって、いぎ鐘かねのつなをにぎろうとしたときです。ふと見ますと、ひびき穴あなにむかいあつた階段かいたんの上に、なにやら白いものが立っているではありませんか。

「そこにいるのはだれだ。」

と、むすこがさげびました。けれども、その白いものはうんともすんともいわず、身動きみうごひとつしません。

「へんじをしろ。」

と、むすこがまたもやどなりました。

「さもなきや、きえてうせろ。この夜中に、こんなところに用はないはずだ。」

けれども役僧は、若者におぼけだと思いこませようと思って、なおも身動きひとつせず、じつと立っていました。それを見て、若者はまたまたどなりました。

「きさま、ここになにをしようってんだ。まともな人間なら、口をきけ。さもなきや、階段からつきおとすぞ。」

しかし役僧は、なかに、口さきだけで、そんなことはできまい、と考えて、あいかわらずだまりこくつたまま、まるで石でもできているように、つつ立っていました。

若者はもういつペンとなりつけました。しかし、それでもなんのききめもありません。そこで、こんどはいきおいよくおぼけにおどりかかって、おぼけを階段からつきおとしてしまいました。おぼけは十段ばかりころがりおちて、すみっこにのびたまま、うごかなくなっていました。

それから、若者は鐘をついて、役僧のうちにかえりました。そして、なんにもいわずに、さつさと寝床にもぐりこんで、またねむってしまいました。

役僧のおかみさんは、ご主人のかえりを長いこと待っていました。いつまでたつても、ご主人はもどつてきません。それで、とうとう心配になつて、若者をおこして、きいてみました。

「あんた、うちのひとがどこにいるか知らない？ あんたよりもさきに、塔とうにのぼったんだけどね。」

「知りませんねえ。」

と、若者わかものはこたえました。

「だけど、あそこのひびき穴あなのむかいがわの階段かいだんの上に、だれだか立っていましたよ。おれがいくらよんでもへんじもしないし、おりていこうともしないから、おれはどろぼうかなんかだと思つて、つきおとしてやりましたよ。まあ、いってごらんささい。そうすりや、坊さんぼうさんかどうかわかりますからね。もし坊さんだたとすりや、気のどくなことをしたなあ。」

いわれて、おかみさんがとんでいってみますと、やっぱりご主人しゅじんです。役僧やくそうは、すみっこにへたばつて、うんうんうなっていました。むりもありません。かたつぼうの足の骨ほねがおれてしまったのですからね。

おかみさんは役僧をかつぎおろしますと、すぐその足で、若者わかもののおとうさんのところへどなりこみました。

「おまえさんとこのむすこはね。」

と、おかみさんはわめきたてました。

「えらいことをしでかしてくれたよ。うちのひとを階段かいだんからつきおとしてき、おかげでうちのひとは、かたつぼうの足をおつちまっただよ。あんなるくでなしは、さつさとうちからつれてつとくれ。」

おとうさんはびっくりぎょうてんして、すぐさまとんでいって、むすこをしかりとばしました。

「なんてえばちあたりのいたずらをするんだ。おまえは悪魔あくまにでもつつかれたにちがいない。」

「おとうさん、まあ、きいとくれよ。」  
と、むすこがいました。

「おれはちつともわるかあないんだぜ。坊ぼうさんたら、まるでわるだくみでもするやつみたいに、ま夜中よなかにそんなところにつつ立ってたんだ。おりやあ、だれだかわからねえから、三べんも注意ちゆういしてやって、口をきくなり、おりてくなりしろっていったんだもの。」

「ああ、おまえのおかげで、おれはとんでもないめにばかりあっている。おまえはどこかへいつちまってくれ。おまえの顔なんかも二度と見たくない。」

と、おとうさんがいいました。

「いや、おとうさん、そいつはありがたいよ。だけど、夜のあけるまで待つておくれ。夜があけたら、どこかへでかけて行って、ぞつとするとやつをおぼえてくるよ。そうすりゃ、おれもそいつでめしをくつてくことができるつてもんだ。」

「なんでもおまえのすきなことをならうがいい。」  
と、おとうさんはいいました。

「わしにとつちや、なんだつておんなじことだ。それ、この五十ターレルをおまえにやる。これをもって、ひろい世よのなかへでていくがいい。だが、生まれ故郷こきようやおやじの名まえを口にするんじゃないぞ。わしがはじをかくことになるからな。」

「わかつたよ、おとうさん、だいじようぶ、それくらいのことなら、よく気をつけてわすれねえようにするよ。」

やがて、夜があげますと、若者わかものは五十ターレルをポケットにつっこんで、大通りにでていきました。そして、歩きながら、ひっきりなしに、

「ああ、ぞつとしたいもんだ。ぞつとしたいもんだ。」  
と、ひとりごとをいっていました。

そこへ、ひとりの男がやってきました。男は、若者わかものがひとりでしゃべっていることを耳にしました。それから、こんどは、ふたりでしばらく歩いていきますと、むこうに首くびつり台だいが見えてきました。すると、男は若者にいました。

「おまえさん、ほら、あそこに木があるだろう。あそこで、七人の男が（一）なわ屋やのむすめと結婚けっこんしたとこなんだ。やつこさんたち、いまはブランブランとぶけいこをしているのさ。おまえさん、あの下にすわって、夜まで待まっていてみな。きつと、ぞつとすることがおぼえられるだろうよ。」

「たつたそれつくらいのことなら——」  
と、若者わかものはこたえました。

「なんでもねえや。だが、ぞつとすること、そんなにあっさりとおぼえられるんなら、このおれのもつてる五十ターレルはおまえさんにやるよ。まあ、あしたの朝、もういちどおれんとこへきな。」

そこで若者は、首つり台のところへいき、その下にすわって、夜まで待っていました。からだはこごえそうに寒くてたまりません。そこで、若者はたき火をはじめました。けれども、ま夜中よなかごろには、風がばかにつめたくなつてきて、いくら火をたいても、ちつとも

あたたかくなりませんでした。風にふかれて、首つり台にぶらさがっている死しがいが、たがいにぶつつかりあつては、ユラリユラリとゆれました。それを見て、若者は、  
（おれなんか、このたき火のそばにいても寒いんだ。あんな高いところにいるやつらは、さぞ寒くて、がたがたふるえているだろうなあ。）  
と、思いました。

若わか者ものは、もともと思いやりぶかいたちでしたので、さつそくはしごをかけて、のぼつていきました。そして、ひとりずつじゅんじゅんにつなをほどいて、七人の男をみんな下におろしてやりました。それから、火をかきたてては、プウプウふいて、からだがよくあたたまるように、みんなを火のまわりにすわらせてやりました。ところが、みんなはすわつたきり、身動みうごきひとつしません。そのうちに、着物きものには火がついてしまいました。それを見て、若者は、  
「気をつけろよ。でないよ、もういちど上へぶらさげるぞ。」  
と、いいました。

ところが、死人しにんは耳がきこえません。うんともすんともいわず、ぼろ着物はもえほうだいです。若わか者ものはぶんぶん腹はらをたてて、いいました。

「おまえたちがじぶんで気をつける気がないんなら、たすけてやることはできねえよ。おれは、おまえたちのおつきあい<sup>あ</sup>いで焼け死ぬ<sup>し</sup>のはごめんだぜ。」

そこで若者は、死人どもを、またもとのようにじゅんじゅんにつるしあげました。それから、たき火のそばにすわって、ぐうぐうねこんでしまいました。

あくる朝になりますと、きのうの男がやってきて、五十ターレルをもらうつもりで、こ  
ういいました。

「どうだい、ぞつとするってのは、どんなことだかわかったかい？」

「とんでもねえ。」

と、若者<sup>わかもの</sup>はこたえていいました。

「いつたい、どうしたらそいつがわかるんだろうなあ。あそこにぶらさがってるやつらは、口をききもしねえし、それに、とんでもねえあほうときてやがる。なんしろ、じぶんのき  
ているぼろ着物<sup>きもの</sup>がもえたつて、そのままほつとくんだからなあ。」

相手<sup>あいて</sup>の男も、このようすでは、とてもきようは五十ターレルをもらえそうもないとみて  
とつて、そのままいってしまいました。けれども、

「あんなやつには、まだあつたことがない。」

と、いいました。

若者わかものもふたたび歩きだしましたが、またまた、

「ああ、なんとかしてぞつとしたいもんだなあ。ああ、ぞつとしたいもんだ。」

と、ひとりごとをいいはじめました。これを、若者のうしろから荷馬車にばしやをひっぱってきた運送屋うんそうやが耳にはさみました。そして、

「おめえさんはだれだい。」

と、たずねました。

「知らねえよ。」

と、若者わかものはこたえました。

「おめえさん、生まれはどこだい。」

と、運送屋うんそうやがなおもたずねました。

「知らねえよ。」

「おやじさんは、なんてんだ。」

「そいつあいえねえよ。」

「おめえさん、なにをしようちゆうぶつぶついつてんだ。」

「うん、そいつなんだ。」

と、若者わかものはこたえていいました。

「おれは、ぞつとすることをおぼえてみてえんだが、だれもおしえてくれねえんだ。」

「ばかなことをぬかすなよ。」

と、運送屋うんそうやがいいました。

「さあ、おれといっしょにきな。どつか、いいところへ世話せわしてやるぜ。」

そこで、若者は運送屋といっしょに歩いていきました。日がくれてから、ふたりはとある宿屋やとやにつきました。ふたりはここにとまることにしました。若者は、へやへはいろいろと  
して、またもや大声で、

「ああ、ぞつとしたいもんだ。ぞつとしたいもんだ。」

と、いいました。

宿屋やとやの主人しゅじんはそれをきいて、わらいながらいいました。

「そんなことがおのぞみなら、ここにやおあつらえむきのことがありますよ。」

「まあ、だまつといでよ。」

と、そばから宿屋のおかみさんが口をだしました。

「いままでだつて、ものずきな人たちがずいぶんおおぜい、命いのちをうしなつてしまつたんじゃないか。こんなきれいな目が、二度と日のめをおがめないようにでもなつたら、それこそかわいそうだよ。」

ところが、若者わかものはいいました。

「どんなにむずかしいことでも、おれはおぼえてみたいんだ。そのために、こうして旅たびにでかけてきたんだから。」

若者はなおも主人に、話してくれとせがみました。それで、とうとう主人は、ここからあまり遠くないところに魔法まほうにかけられているお城しろがあつて、そこで三日三晩、寝ねずの番ばんをすれば、ぞつとするとというのがどんなことだかわかるでしょう、といいました。そして、さらに話をつづけて、寝ねずの番ばんをするだけの勇氣ゆうきのあるものには、王さまがごじぶんのお姫ひめさまをおよめにくださるといふのです。ところが、そのお姫さまというのが、おてんとさまのてらすこの世界せかいで、いちばん美しいかたなのです。それから、お城しろのなかにはたくさんたからの宝ものもあつて、それを悪魔あくまどもが番ばんをしています。けれども、うまく寝ねずの番ばんをやりとおせば、その宝ものも手たからにはいつて、貧乏人びんぼうにんでもたちまち大金持おおかねもちになれるのです。いままでにもずいぶんおおぜいの人たちがお城しろにはいつていきましたが、まだひと

りとしてかえつてきたものはありません、と話してきかせました。

若者わかものは、あくる朝、さつそく王さまのまえにいつて、

「もしおゆるしくださいますなら、わたくしはその魔法まほうのかけられているお城で、三日三晩ばん寝ねずの番ばんをいたしとうございます。」

と、もうしました。

王さまは若者をじつと見つめていましたが、若者が氣にいりましたので、こういいました。

「おまえは、なんなりと三つのものをねがいであるがよい。それらのものを城しろのなかにもちこむことをゆるす。だが、生きものであつてはならぬぞ。」

いわれて、若者わかものはこたえました。

「それでは、火と、旋盤せんばんと、それから小刀こがたなのついた細工台さいくだいをおねがいたします。」

王さまは、昼まのうちに、それらのものをのこらずお城のなかにはごびこませておきました。さて、日のくれかかったころ、若者はお城にでかけていききました。そして、なかのひと間まにはいりこんで、火をかんかんおこし、小刀こがたなのついた細工台さいくだいをそばにおいて、じぶんは旋盤せんばんの上にこしをおろしました。

「ああ、ぞつとしたいもんだなあ。だが、ここでもやっぱりだめだろう。」  
と、若者わかものはいいました。

ま夜中よなかごろ、若者はもういちど火をかきたてようと思いました。そして、火をプウプウ  
ふいていきますと、だしぬけにすみっこのほうから、

「ウウ、ニヤオ。おれたちや寒くてたまらん。」

と、さげんだものがありました。

「ばかだな、おまえたちは。」

と、若者がどなりました。

「なにをいってんだ。寒かったら、ここへでてきて、火にあたって、あつたまったらいい  
じゃねえか。」

若者わかものがこういいおわつたとたん、大きな黒ネコが、ものすごいいきおいで、とびだし  
てきました。そして、若者の両わきにすわつたかと思うと、火のような目玉をぎらぎらさ  
せて、若者の顔をぎゅつとにらみつけました。

しばらくして、からだがあたたまってきますと、そのネコどもが、

「おい、きょうだい、トランプをやらないか。」

と、さそいかけました。

「やらなくってどうする。」

と、若者わかものがこたえました。

「しかし、そのまえに、ちよいとおまえの足を見せてくれよ。」

こういわれて、ネコどもは足のつめをのばして見せました。

「いよう、なんて長いつめをしているんだ。ちよいと待ちまなよ。まず、こいつを切つてからにしくつちや。」

若者はこういいながら、ネコの首くびつたまをつかんで、細工台さいくたいの上うへにのせると、四つ足をぐつとねじでしめつけてしまいました。

「おまえらの指を見たら、トランプをする気がなくなつた。」

若者はこういふがはやいか、ネコどもをたたき殺ころして、おもての水のなかへほうりこんでしまいました。

こうして、若者わかものが二ひきのネコをかたづけ、ふたたびたき火のそばにもどつて、すわろうとしたときです。とつぜん、あつちのすみからも、こつちのすみからも、もえる火のくさりにつながれた黒ネコや黒犬が、とびだしてきました。しかも、その数はあとから

あとからふえるばかりです。とうとうしまいには、若者が身動きみうごひとつすることができないほどになってしまいました。そして、そいつらは世よにもおそろしいうなり声をあげて、若者のたき火をふみつけ、ふみにじって、その火をけそうとするのです。

そのようすを若者はしばらくのあいだじつとながめていましたが、あんまり腹はらがたちましたので、いきなり細工さいくが刀たなを手にとつて、

「とつととうせやがれ、こんちくしょうめら。」

と、さげびながら、そいつらめがけて切つてかかりました。なかにはにげてしまったのもありましたが、のこつたやつらはうち殺ころして、おもての池のなかにほうりこみました。

それから、若者わかものはたき火のそばにもどつてくると、かすかにのこっている火種ひだねから火をふきおこして、あたたまりました。こうして、すわっているうちに、たまらないほどねむくなつてきて、もうどうにも目をあいていることができなくなりました。そこで、あたりを見まわしますと、かたすみに大きなベッドがありました。

「こいつはちようどいいや。」

若者はこういいながら、そのベッドのなかにもぐりこみました。ところが、目をつぶろうとしたとたん、ベッドがひとりでにうごきだして、お城しろじゆうをぐるぐるまわりはじめ

ました。

「うまいぞ、うまいぞ、もつと走れ、もつと走れ。」

と、若者わかものがいました。

するとベッドは、まるで六頭とうの馬にでもひかれていくように、敷居しきいをこえ、階段かいだんをのぼったりおりたりして、ごろごろとうごきつづけました。そのうちとつぜん、ベッドがくるつとひっくりかえったかと思うと、いきなり若者の上に山のようにのしかかってきました。けれども、若者もまけてはいません、ふとんやまくらはねとばして、その下からぬけだしました。そうして、

「もう、だれがのるもんか。」

と、いいすてて、こんどはたき火のそばにねころぶと、夜のあけるまでねむりこんでしまいました。

あくる朝、王さまがやってきました。王さまは、若者わかものが床ゆかの上うへにねているのを見ますと、おぼけのために殺ころされてしまったのだらうと思おもいました。それで、王さまは、

「りっぱな男おとこなのに、おしいことをしたものだ。」

と、いいました。

若者はこれをききますと、むつくりおきあがつて、

「まだやられちやおりませんよ。」

と、もうしました。

王さまはびつくりしましたが、でも心のそこからよろこんで、いったいどんなめにあったのだ、とたずねました。

「うまくいきましたよ。」

と、若者わかものはこたえていいました。

「これで、まずひと晩ばんはすんだわけですが、あとのふた晩もなんとかなるでしょう。」

若者わかものが宿屋やどやの主人しゅじんのところへかえつてきますと、主人もびつくりして目をまんまるくしました。

「わたしや、あなたの生きた顔を二度と見ようとは思いませんでした。」

と、主人しゅじんはいいました。

「どうです、ぞつとすること、どんなことだかわかりましたかね。」

「だめさ。なにかもむだだ。ああ、だれかおしえてくれる人はないかなあ。」

二日ふたひめの晩ばんも、若者わかものはその古いお城しろにでかけていきました。そして、たき火のそばに

すわつて、またいつものように、

「ああ、ぞつとしたいもんだ。」

と、口ぐせになつてゐることばをいはじめました。

ま夜中よなかちかくなりますと、ガタガタ、ドンドンというものの音がしました。さいしよのうちはおだやかでしたが、それがだんだんはげしくなるのです。そのうちに、ちよつとしずかになりましたが、さいごにはものすごいさけび声とともに、人間のからだはんぶんが半分、えんとつをつきぬけて、若者の目のまえにおちてきました。

「おい。」

と、若者がどなりました。

「もう半分いるぞ。これじやたりないじやないか。」

すると、またもやあたりがさわがしくなつて、ドタバタ、ギヤアギヤアやったあげく、あとの半分もおちてきました。

「ちよつと待まつてろよ、もうすこし火をおこしてやるからな。」

と、若者わかものがいいいました。

若者が火をふきおこして、ふりかえつてみますと、どうでしょう。さっきの半分はんぶんずつ

のからだだが、いつのまにかつながつて、おそろしい男が若者の席せきにがんばっているではありませんか。

「おい、じょうだんはよせ。そのこしかけはおれのだぞ。」

と、若者はいいました。

すると、その男は若者をつきのけようとしましたが、若者もだまっではいけません。しやにむにその男をおしのけて、またもとの席にすわりました。と、こんどは、あとからあとから、たくさんの人間がおちてきました。そいつらは死人しにんの骨ほねを九つと、されこうべをふたつもつてきて、金かねをかけて、九柱きゅうちゆうぎ戯ぎ（ボーリングにたあそび）をはじめました。若者もやってみたくなくて、

「どうだね、おれもいれてくれないかい。」

と、たずねました。

「いいとも、金があるんならな。」

「金ならうんともつてるぜ。だが、その球たまはまんまるくないな。」

と、若者はこたえました。

そうして、若者はされこうべをとつて、旋盤せんばんにかけ、まるくけずりました。

「さあ、こんどは、ずっとよくころがるぜ。そうれ、うまくいく。」  
と、若者はいいました。

それから、若者はその男たちといっしよに九柱戯きゆうちゆうぎをやつて、金をすこしそんなしました。ところが、十二時の鐘かねがなつたとたん、なにもかもが目のまえからきえてなくなつてしまいました。そこで若者は、ねころんで、ぐつすりとねむりました。

あくる朝、王さまがやつてきて、ようすをきこうとしました。

「こんどは、どんなぐあいだつたな。」

と、王さまがたずねました。

「九柱戯きゆうちゆうぎをやつて、銅貨どうかを二つ三つそんなしました。」

と、若者わかものはこたえました。

「では、ぞつとしなかつたのかね。」

「とんでもない、すっかりゆかいにあそんでしまいましたよ。ぞつとするつてのが、どんなことだか知りたいんですがねえ。」

と、若者がいいました。

三日めの晩ばんも、若者はまた旋盤せんばんにこしかけて、いかにも腹はらだたしそうに、

「ああ、なんとかしてぞつとしてみたいもんだ。」  
と、いいました。

夜がふけたころ、六人の大男が棺おけをひとつかつぎこんできました。すると、若者は、「ははあ、これは、きつと二、三日まえに死んだおれのいとこだな。」  
と、いいながら、指であいずして、よびかけました。

「おい、こつちへこいよ、こつちへこいよ。」

大男たちは棺を床におろしました。若者はそのそばへいって、ふたをとつてみました。すると、なかにはひとりの死人がねていました。顔にさわってみますと、まるで氷のようにつめたいのです。

「待つてなよ、いまちよつとあつたためてやるぜ。」

若者はこういって、火のそばへいって、じぶんの手をあたためてから、その手を死人の顔の上のせてやりました。けれども、死人はあいかわらずつめたくて、ちつともあたたくはなりません。そこで、若者は死人を棺からだして、火のそばへつれていきました。そして、じぶんがそこにすわって、そのひざに死人をのせました。そうして、血がめぐりだすように、死人の両腕をこすってやりました。しかし、それでも、なんのききめも

なさそうです。そのとき、ふと、

「ふたりでいっしょに寢床ねとこにねれば、おたがいにあつたまるもんだ。」

と、思いつきましたので、死人をベッドのなかにねかして、ふとんをかけてやりました。それから、じぶんもいっしょにならんでベッドのなかにはいりました。

しばらくすると、死人もあたたまってきて、うごきだしました。

「そうれ、みろよ、あつたためてやってよかつたろう。」

と、若者わかものはいいました。

ところが、その死人しにんがむつくりとおきあがって、

「やい、こんどは、きさまをしめ殺ころしてやるぞ。」

と、どなりました。

「なにつ、それがおまえの恩おんがえしか。さつきと棺かんおけのなかにもどりやあがれ。」

若者わかものはこういうといっしょに、死人をもちあげて、棺のなかにほうりこみ、ふたをしてしまいました。すると、さつきの六人の男がでてきて、またその棺をどこかへはこんでいきました。

「ぞつとしそうもないなあ。」

と、若者はいいました。

「ここにいたんじや、一いっしょう生しょうかかったつて、おぼえられやしない。」

そのとき、またひとりの男がはいってきました。その男はほかのだれよりも大きくて、みるからにおそろしい顔つきをしています。もう年をとっていて、白い長いひげをはやしています。

「おい、小僧こぞう、ぞつとするつてのがどんなことか、いますぐおれがおしえてやる。きさまの命いのちはもらったからな。」

と、その男が大声にいいました。

「そうあつさりとやられてたまるか。おれだつてだまつちやいねえぞ。」  
と、若者がいいました。

「よし、ふんづかまえてくれるぞ。」  
と、その怪物かいぶつがいいました。

「おつと、あわてなさんな。そんな大きな口をきくんじやねえよ。おれにだつて、おまえぐらいの力はあるんだぜ。いや、もつと強いかもしれねえ。」

「そのお手なみを見せてもらいたいもんだ。」

と、じいさんがいいました。

「もし、きさまがわしよりも強かったら、きさまをゆるしてやる。さあ、こっちへこい、力くらべだ。」

じいさんはくらい廊下ろうかをいくつもおとって、かじ場の火のそばへ若者わかものをつれていきました。そして、そこにあつたおのをにぎって、たつたひと打ちうちでかなしきを地面じめんのなかにめりこませてしまいました。

「そんなことなら、おれのほうがもつとうめえ。」

若者はこういって、べつのかなしきのところへいきました。じいさんは見物けんぶつするつもりで、若者のそばにらんで立っていました。白いひげは長くたれていました。そのとき、若者はおのをにぎって、ただひと打ちにかなしきをうちわり、じいさんのひげもそのわれめにいっしょにはさみこんでしまいました。

「さあ、どうだ、死ぬのはおまえだぞ。」  
と、若者はいいました。

それから、若者わかものは鉄てつの棒ぼうをつかんで、めちやめちやにじいさんをうちのめしました。さすがのじいさんも、とうとう泣なきだして、どうかうつのはもうやめてください、そのか

わりお金をたくさんさしあげますから、としきりにたのみました。そこで若者はおのをひきぬいて、じいさんをはなしてやりました、すると、じいさんは若者をつれて、またもとのお城にもどり、地下室にはいつて、金貨のぎつしりつまった三つの箱を見せました。そして、

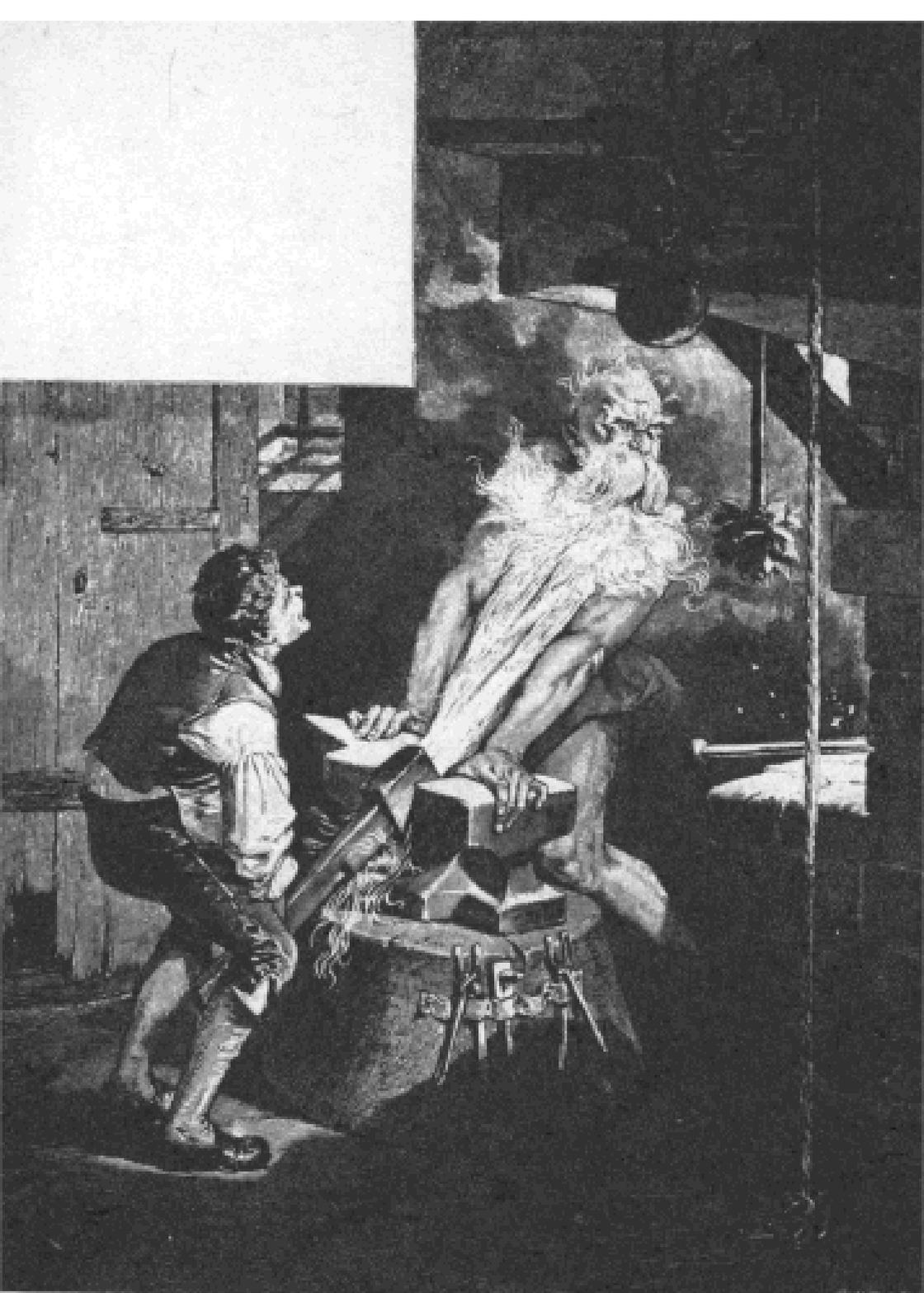
「このうちのひとつは貧乏人に、もうひとつは王さまにあげますが、あとのひとつはあなたのものです。」  
と、いいました。

そうこうしているうちに、十二時の鐘がなりました。と、そのとたん、ばけものすがたがきえうせてしまい、若者はまつくらやみのなかに、ただひとりこのこされました。

「なんとかぬけだせそうどうぞ。」

若者はこういつて、手さぐりしはじめました。そのうちに、ようやく道を見つけだしました。それから、もとのへやにもどつて、またたき火のそばでねむりこんでしまいました。つぎの朝になりますと、王さまがやってきて、

「ぞっとするというのがどんなことか、こんどはおぼえたらうな。」



と、いいました。

「いいえ、とんでもございません。」

と、若者わかものはこたえていいました。

「死しんだわたしのいとこがまいりました。それから、長いひげをはやした男もまいりました。そいつは、地下室ちかしつでたくさんかねの金を見せてくれました。でも、ぞつとするというのがどんなことかは、だれもおしえてはくれませんでした。」

それをきいて、王さまはいいました。

「おまえはこの城しろの魔法まほうをといってくれた。わしのむすめを、妻つまとしておまえにやるとしよう。」

「それはまことにありがたいことですが。」

と、若者わかものはこたえました。

「しかし、ぞつとするというのがどんなことか、わたしにはいまもってわかりません。」

こうして、金貨きんかが地下室ちかしつからはこびだされて、ご婚こんれい礼れいの式しきがあげられました。

わかい王さまは、お妃きさきさまをたいそうかわいがり、心から満まん足ぞくしていました。けれども、あいもかわらず、

「ああ、ぞつとしたいものだ。ぞつとしたいものだ。」

と、口ぐせのようについていました。しまいには、お妃さまは、これをきくのが、いやでいやでたまらなくなりました。

ところが、お妃づきの侍女が、

「いいことがございます。あたくしが、ぞつとするということを、王さまにおしえてさしあげましょう。」

と、もうしました。

侍女は、お城の庭をながれている小川のところへでていきました。そして、おけにドジョウをいっぱいとってこさせました。夜になって、わかい王さまがねむっていますと、お妃さまは侍女にいわれたとおり、王さまのかけぶとんをそつとはいいで、ドジョウのはいっているおけいっぱいのつめたい水を、王さまの頭からザアツとかけました。とたんに、たくさんのドジョウが王さまのからだのまわりをピチャピチャはねまわりました。すると、王さまは目をさまして、さげびました。

「うわあ、ぞつとするわい。ぞつとするわい。これではじめてわかったよ、ぞつとするといいことが。」

(1) なわ屋やのむすめと結婚けっこんしたというのは、首くびつりの罰ばつをうけたことです。

## 青空文庫情報

底本：「グリム童話集(二)」偕成社文庫、偕成社

1980 (昭和55) 年6月1刷

2009 (平成21) 年6月49刷

※表題は底本では、「こわいことを知りたくて  
「#改行」  
けた男の話」となっています。

旅《たび》にでか

入力：sogo

校正：チエコ

2019年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

こわいことを知りたくて旅にでかけた男の話  
グリム Grimm

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 矢崎源九郎訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>